

新年快樂

水面の反射光が眩しく
思わず復活の呪文を唱えた
香典すら渡せなかった
彼女が捨てられた港で

時が止まった彼女を
千代に八千代に刻むべく
革の手袋を捨て
凍えた指で生命線をなぞる

三三五五に消えた仲間からはぐれ
あどけなさの残る顔で大人に囲まれ
何一つ訴えることもできず
救いを求めることもできず

彼女が欠けた世界で
一人静かに佇む
不滅の精神を悼む
可憐な笑顔を憶う

線香を手向ける
花火の上がない港で
爆竹を飾る人々
餃子を包む指に痛みを加え
油の海に涙を添え投げ込む

桐島こより